

にも擴がつて居たのを近年になつて次第に廢せられた様である。廣島縣の南部でも三十年前までは用ひられて居た。丹波あたりでも十年前まではあつたが今は殆ど無いといふ。これは薪炭の高價になつた關係もあらう。變化が進んで清潔を好む衛生思想の發達した關係もあらう。炬燵といふものは爐から進化したものかとも思ふが今その起原を調べて居ない。朝鮮の溫突の様

な巧妙な暖房法が北海道や樺太に無いのは兩雪の濕氣の多い地方だからでもあらうか。併しアイヌの堅穴と溫突との間には一脈の類似點が無いとも云へない。

とりとめもないことを何時まで書いても際限が無いからこの邊でやめる。匆卒の間の瞥見で誤解の多いことを豫期する。切に各位の御高教を待つ。(完)

西遊夢錄

(七)

瀧川規一

蘇國巡遊

(VIII)

アバザンよりバース (Perts) まで

アバザンで煙製のハドック (haddock) に飽きを覺え、旅鳥の身の常として靜心もなく、附近の名所舊蹟を以て逃がすまじと腐心する。折角アバザンまで北上した以上是非見逃がす可からざるものがある。貴國の遊獵によつて故國にまで

その名の轟くバルモラル (Baltimore) の名城がそれである。アバザンからバラタ (Ballater) まで汽車で行く。それより乗合の自動車である。バラタまでの車窓から眺めるダー (Dae) 河畔の風景は「上流に廻るに従つて變化を増し、風景として天下に誇るに足る」とアバドニーアンの自慢する程あつて、旅客の歎賞に値して餘りありと云つても過言ではない。清き河流が自然を剝削するに剛軟宜しき得、或は礫石を洗ふ潺湲の流となり、或は豁谷を斷裁して大小の瀑布を作り、或は溪

流を貫いて兩岸の丘陵に密林の茂みを見せ、到る處に樺の木
の軟葉は旅客の目を慰める。城郭一帯の靜境は改築修繕の手
を新に加へて古色蒼然たることなしと雖王者の閑居として好
適の地たることを思はしめ、附近の鹿林は饒蒼の樹間を狩座
として雄叫びの快遊を恣にするに不足なき森林である。下賤
の旅人は只周圍を一周して満足する。夏時晷を避けて顯貴の
滞在車であり、護衛者の嚴にして懇るなるに感じて、車をバ
ラタに還らし、附近の瀑布を觀て、再び花崗岩の都に歸る。
汽車はアバチンより吾々を運んで海岸傳ひにモントロ
ズ (Montrose) に急ぐ。

モントロズの町はエスグ (Esk) 河の河口にある入江に
面し、船渠あり諸會社殊に製麻布會社その他の製造業に工業
都市として小規模ながら繁盛を見せて居る人口一萬二千はか
りの小都會である。

世界大戰當時飛行場を設けられ、北海空軍の風聞に人心を
恟々たらしめた目があつたとホテルの人々の話である。文學
研究者にとつては、サア・ウオータ・スコットの、小説アレ
センド・オズ・モントロズ (A Legend of Montrose) を除い
ては遺憾ながら何の興味もない處である。市内見物に半日を
費したのみで引き揚げる。

鐵橋を超えたる汽車は猶も海岸線を取つて、アアブ羅斯
Arbroath) に到る。工業都市としてまた海港としてモン
トロズと比し甲乙なきが如くに一見感ぜられるとは云へ、人
口に於て二萬を超え、文學との交渉ある見地から自分にはモ

ントローズに優る興味を感じた都會である。蘇國の文藝家
ウオータ・スコットの小説アンチクオリ (Antiquary) に説
明された Fairport なる港がこのアアブ羅斯港のことであ
り、東南十二哩の地點に今日海波の上に見る燈臺の光のある
處には傳説をもつ Inchcape Rock の暗礁がある。アアバ
ロソック (Aberbrothock) の尼院の院主が航海者の便を計り
岩礁の存在する地點に浮木を繋ぎベルをつけて警戒の標的と
したのであるが、一海賊は院主の志を無にして鈴鐘を盗みと
つた。天罰遂に海賊の身に及び一年後に船貨を積んだ海賊船
は暗礁の爲に沈没した。それを主題として民謡を作つたのが
詩人ロバート・サウジー (Robert Southey) である。僧院
の南外陣の今日も猶殘れる上層窓の形が圓形の丸窓なるは、
the Round O として海上遙に波浪に漂ふ者共にとつて幾世
紀の間目標となつたと案內者が得意に説明する。十二世紀
に尼僧がウィリヤム・ライオン (William the Lion) によ
つて創建されて以來祝融の災をうけて今日では見る影もなく
破壊され、只昔の宏壯なる建築を忍ばすべく厚壁のみが天空
に向つて高く聳へ立つてゐる。民謡の價值としてサウジーの
作品の評價は兎角の議論もあるが、この地を過ぐる者は必ず
見るべきものである。

この地より内地に向つてキリムア (Kirkcubright) と云ふ村
ともつかず町ともつかぬ田舎町に行く。そんな田舎町に行つ
たことを話しては人より何故にそんな處まで出かけたかと思
ふがられる。邦人にして未だこの地に足を踏み入れた者が殆

どないさうである。倫敦はサウス・ケンジントン・ホールの會堂に英詩朗讀會があつた時、聴者として隣席したのは現今戯曲界の奇才として文名噴々にたるサア・セームス・バリ(J. H. James Barrie)その人である。椎木頭^{ツヅキ}のバリ氏ならその姓名

を名乗つて貰はなくとも、肖像を一見した丈で直にそれと判る。余が滯英中新らしい作品メリ・ローズ(Mary Rose)を上演して観客に涙を絞らしてゐた作者であり、文學生活の前半期ではあるが、蘇國を題材にして幾多の小説を書いたもののキリムアの一寒村が斯界では有名となつてゐる。況んやお伽芝居の Peter Pan を作つて遂にハイデ・パークの一隅 Kensington Garden の Serpentine 池の泉頭に Peter Pan の銅像を讀者觀客の知らぬ間に建てて國家に寄附し名物にしてゐる作家の生れ故郷がこのキリムアであるに於てなやである。倫敦にて直接面談の機會を得たこの天才を想ひ出しては矢も楯もたまらずこの一寒村に走つたのである。殊にこの村にある納屋然たるオールド・ライツ(Auld Lichts)と稱せられるプレスビテリアン教派のセセツション教會(Secession Church)はバリ氏の手になつた Auld Light Hymns を讀む者には宗派の論争は兎も角も文學研究の一助として一見の價値があり、A Window in Thurns と題する氏の小説集の Thurns は實にこのキリムアに他ならぬのである。その他體軀矮小なる牧師のロマンスを描いた Little Minister と題する小説と云ひ、このキリムア附近の風物を目前に見て再びこれ等の小説を讀むならば叙景と云ひ人物の躍動と云ひ、

讀者の印象が腦裏に生きたものとして永久に残るのである。作者自身と面晤し、作品の背景を實地に踏む身の幸運をつくづく感じる。幾度か不審された寒村に旅の軌道を外らしたのもそんな理由である。

アブロースに引き返へし、またもや海岸線によつてダンザー(Dundee)に出る。ダンザーは人口十九萬に近く蘇國第三の大都會である。テイ(Tay)灣に架つてゐる有名な鐵橋は三千五百九十三ヤードあると云つて土地の人々が誇りとする。海港として都合よき入江を有し都會としての壯觀を具備してゐる。或は市公會堂と云ひ、取引所と云ひ、税關と云ふ、或は圖書館と云ひ、近くの都會のセイント・アンドリュース(St. Andrews)大學と併合して總合大學を組織してゐるユニヴァシチ・コレッジ(University College)をはじめ教育機關としての大小の學校と云ひ、大都會に必要なものは悉く備はつて居る。都會人の肺臓とも云ふ可き公園は大小併せて四つあり、市の背後にはダンザー・ロー(Dundee Law)と稱せられる丘陵があつて一望の下に全市及び其附近を下瞰することが出来る。エナンバラ市及びグラスゴ市に行く程の者ならば必ずダンザー市を見物せよとE老人からも勧められて居たが來て見ると成程尤だと首肯される。海路北航の際甲板上から遠望してゐたテイ河の鐵橋も間近かに渡らなければならなくなつた。ダンザー市は諸種の工業殊に麻布類の製造業を研究する者にとつては興味の盡きぬ處であるかも知れないが、自分には特種の目的をこの地に見出し兼ねる地である。

寧ろテイ河の鐵橋を渡らずにパース(Pertth)に行く道順として足とまりの場所を見出したるに過ぎない。鐵橋を渡らずパースに走つたなどと只それだけを他言することは誤解を招く恐がある。而かもアバザンに永く滞留して後に鐵橋を渡らずパース行きを企てたなどと英蘭人に云はうものなら、愈アバザン仕込みのコーカニードと笑ふであらう。アバ人よりも日人の方が出藍のほまれがあると思ふであらう。吝嗇漢の一アバ人が汽車にも乗らず徒歩でエデンバラ市行きを企てた南下する途中には幾多の關所があつて通過には道錢を要求する大抵は二錢が高々六片である。一定しないが端錢をとる。これをトール(Toil)と英語では云ふ。柴垣に等しき門を作つてある關所ならばトール・ゲート(Toil-gate)と呼んである金をとるからトールと云ふのか、通るからトールと云ふのかその程は知らないが、兎も角道錢のこと及び橋錢のことをトールと云つてゐる。自動車でも關所を通る時は運轉手が車を停めて端金を拂つてゐる。處がアバ人はアバザン市からダンザ市まで一錢も拂はずに徒歩旅行をして來た。さてテールの鐵橋まで來て困つた。

鐵橋は只鐵道の爲めの鐵橋であつた。渡し船で對岸に渡るには無用の金を拂はねばならぬ。それで一策を案出したのがパース廻りをして、橋錢の要らぬ道をつたと云ふのである。この話はダンザ市では人の口の端によく上ると見えて、宿の帳場でも余のパース行きを聞いて、ジャップのコーカニードと云つて笑つてゐた程である。

サ・ウカータ・スコットはザ・フェア・メイド・オヴ・パース(The Fair Maid of Perth)と題するローマンスを著してパースの町人の美しい娘カザリン(Catherine)を血もあり肉もある生きた美しき女主人公にしてゐる。今日でもパースに行けばロバート王第三世の皇太子デヴィッド(David)の現心を抜かざしめた程の美人が居るとも限らず、居ないとも限らないが、兎にも角にもこの美しいカザリンは幾多の戰爭陰謀までも惹き起した風雲娘である。スコットのこの物語の讀者は息もつがずに娘の運命の終局は如何にと夢中になつて讀み耽ける。

「若し聰明なる他國人にして蘇國中の最も變化に富み最も美しき地方を述べよと要求されるならば恐らくパースの郡を擧げるであらう。蘇國の他地方の人がたとへ生れ故郷の地方を偏愛の心から第一に指摘するにしても、其時は必ずやパースを第二に名指すであらう。斯くしてパース郡が北方王國の最も美しき地方であると云ふ土地の人々の要求を當然のものとして認めるであらう」と云ふのが文豪スコットの豪語である。そのパースの市に余が旅足を餘儀なく向はしめたと云つても毫も耻づる處はない。町としては人口三萬五千に近い都會ではあるが、蘇國の歴史としてパース郡の寸土も無交渉な處はないのである。スコットの小説によつて豪族間の争鬭の實景が活寫されてゐる地方としてパースは忘れられぬのであるが、更に本年の五月に誕生百年記念を催さんとしてゐる近代畫家兼詩人であるロセツチ(D. G. Rossetti)の有名なる

史詩「玉の悲劇」(King's Tragedy)の主題となつてゐる蘇國王セームス一世(Jamse I)の横死が、一四三七年に起つたものゝ、バースのブラックフライヤス・モナステリ(Blackfriars Monastery)と云ふ僧院内である。當時宮廷はこの僧院内に移されてゐたが、反逆者等は宮内大臣と示し合はせ、不意に國王を襲つた。國王セームスは、その時皇后及び官女等と四方八方話をして居られたが、餘りの不意打ちで、國王を守る衛兵一人もなく、官女等は勿論何の役にも立たず、國王は地下の一室に身を忍ばせられたが、反逆者の爲めに發見され、勇敢に抵抗されたが、力遂に屈し、胸に十六の傷を受けて非業の最後を遂げられた。詩人ロセツチの主題としたのは、國王の悲しき運命のみではなくて、その際官女の一人が戸口の扉の門の代りに片腕を貫いて戸を開けさせまじと努めた武勇談である。衆寡敵せぬ上に女の片腕が如何に強くとも外部から押しあけんとする強力を防ぐに足らず、腕は挫け身は其場に倒れたが、其間に國王をして地下室に身を秘めしめたのである。

○ペリユーの鑛産

主なものは金銀銅鉛亜鉛、ザアナデウィム、石油である。金は一九二六年に著しく減少した。目下パタス地方の量が多い。銀は世界で第三位の産出國である。モロコチヤ地方が多い。國內到る所に産し、北部の銀山八、中部に一二、南部に三、合計二三の鑛山がある。銅は世界第八位で鉛や亜鉛の産も多い。ザアナデウィムは從來世界第一であつたが、一九二五年英領アフリカの量にまけたが、一九二六年には再び首位に回復した。産出量八五三、三二七、七六二、二七四秘磅に達した。最後に一九二六年この國に資本金百萬ポンドの新石油會社が出来たことを見逃してはならぬ。これはスタンダードの傍系會社である。ペリユーの石油はこの國の第一位にあつて一九二六年には一、四二二、八〇四噸、一一、二〇九、一三三秘磅に達し、同年度で世界第八位にしてゐるのである。

その剛勇なる官女カザリン・ダグラス(Catherine Douglas)は爲めに「門娘のクート」(Kate of Barless)の渾名を永久に残したのである。ロセツチの詩が近代詩の一特徴を表象するものとして讀者を有する限りはバースの町と今も町の北側にある修道院の遺跡は忘れられないのである。叛賊は一ヶ月後に悉く誅に服したと聞いて胸の動悸が靜まる。バースの美しい娘が住んで居つた處だとされて、遊覽客の見物の場所となつてゐる家をはじめ、多くの修道院は夫々の歴史に富み、足一處この地に踏み入れるならば、史上及び文學上の回顧の泉は盡きることを知らないのである。歴代蘇國の即位石となつたスコン(Scone)の石は今移されて、倫敦ウエストミンスター寺院内にあつて、大ブリテンの元首の即位石とはなつてゐるが、もとはバース附近の尼院にあつたのである。次に名残り盡きせぬバースを後にして進み行かんと欲する目的地は蘇國古代民謡の主として起つた田舎地方である。